

# 存在の負い目

## ——高橋和巳『墮落』論——

伊藤 益

1

高橋和巳は、『文芸』昭和四十年六月号に、『墮落——あるいは、内なる曠野——』というおよそ二百七十枚前後の中編を発表した。これは、かつて満州青年連盟の一員として満州国の建国にかかわった混血児福祉施設の團長が、ある新聞社から施設の活動を表彰されたことを機に、道徳的・倫理的に崩壊してゆく姿を描く作品である。この作品は、発表当時、激しい批判に曝された。

論者たちはいう。満州国建国の理想（王道楽土、五族協和）を現実の国家（日本国）によって裏切られ、終戦直前のソ連軍の侵攻に際してこの世の地獄を見た主人公の、戦後の安定社会のなかでの挫折は、たしかに、戦後の日本に対する一つの反定立たりえている。戦後の日本社会は、臭いものに蓋をするように、満州事変以来の（戦争）の歴史を巧みに隠蔽してきた社会であり、昭和の精神史を自己の内面に引きずる者の挫折は、そうした社会に対する暗黙の批判となりうるからだ。しかし、十

五年戦争全体への省察が主題となるこのような作品は、より大きな規模で構想されるべきもので、現行の形態では主題の掘り下げに關して不十分であるとの謗りを免れない、と（たとえば、野間宏「新しい二つの破壊物語」高橋和巳著作集五卷末論文、杉浦明平「散華」と『墮落』「人間として」一九七一年六月号など）。

『墮落』は、昭和四十四年二月に、河出書房新社から単行本として刊行された。その「あとがき」にはつぎのような一節が見える。

雑誌に発表した直後から、親しい友人たちはより大規模な長編に拡大されるべき内容であろうと忠告してくれたし、日本人の昭和の精神史を内部から文学を通して反省し批判するという私自身の意図からも、その忠告はうなずけるものだった。

もし、作者がみずから語るように、『墮落』が「日本人の昭

和の精神史を内部から文学を通して反省し批判する」ことだけを意図しているとすれば、論者たちの右のような批評は至極妥当なものだといつてよいだろう。満州国の建国と崩壊とをめぐつては、それが昭和の精神史の根幹に触れる問題であるがゆえに、多様な思索が交錯する可能性がある。ところが、『墮落』はそうした多様性を顧慮する視点には立ちえていないからだ。この作品は、昭和の精神史の叙述としてはあまりに貧弱だといわざるをえない。そこに豊かな肉づけを施そうとすらなら、作者は、この作品を、大規模な長編へと変貌させざるをえなかったはずである。

しかし、作者の意図はどうであれ、『墮落』は、単に「日本人の昭和の精神史を内部から文学を通して反省し批判」した作品にとどまるようには見えない。そこには、「日本人の」とか「昭和の」といった限定を超えて、より深く人間性の根底に迫る主題が伏在しているからだ。

『墮落』が作者自身による「あとがき」をもつ単行本となつた年は、あたかも、作者高橋和巳が京都大学文学部助教授として、学園紛争の渦中にあつた年である。少々穿った見方をする と、「あとがき」の記述は、作者が当時左派学生の「教祖」的存在にまで祭り上げられていたことと密接にかかわっているように思われる。すなわち、作者は、この作品に、それ自身が抱えてこんでいた問題意識を故意に限定しつつ、イデオロギー的な外皮を与えなおすことによって、左派の共感を獲得しようとしたものではなかったかと考えられる。妻高橋たか子が厳しい口吻

のもとに指摘する（「高橋和巳の思い出」構想社、一九七七年など）ように、高橋和巳は、政治的なイデオロギーの構築よりも、むしろ、人間の根底に渦巻く朦朧たる情緒をどこまでも深く思念化してゆくことに本領を発揮する作家だった。単行本『墮落』の「あとがき」は、作者が、自身の本来性からいささか遠ざかった地点で作品を振り返ることによって生じた、自己錯誤ともいふべき事態のあらわれのように思えてならない。

小稿は、あるいは作者自身が明瞭に意図していなかったかもしれない、『墮落』の主題を、ある普遍性のなかへと再定立することを試みるものである。作品が作者を離れて自立しようという単純な作品論に、一切を還元しようとは信ずるからではない。作品がそれ自体の文脈のうえに提示する思念が読者層内部での共通性を超えた、ある普遍性を開示するとき、その普遍性の具相をあらわにすることは、作者の意図とは本質的に無関係に、評者の側に課せられた重要な責務だと考えるからだ。

## 2

『墮落』は、「なぜ涙を流したのか」という一文をもつて始まる。主人公青木隆造は、私財をなげうち、辛苦に困苦を重ねた末に、ようやく、混血児福祉施設兼愛國の運営を軌道にのせる。彼の活動は、いま、ある新聞社からの表彰という形で社会的に報われようとしている。彼は、その表彰式の中で唐突に涙を流す。それは、表彰式の傍観者たちが推測したような涙、すなわ

ち、多年の辛酸がようやく認められたことへの感慨から出た、喜悅の涙などではなかった。

かつて満鉄社員として満州に渡り、満州青年連盟の一員となつて王道楽土、五族協和の理想の実現に努力した体験をもつ青木隆造。彼は、彼がその建国のために粉骨砕身した満州国が、日本本土防衛上の生命線程度の意味しかもちえなかつた現実、さらには、それが、日本国の単なる鏡像にすぎなかつたがゆゑに、鏡の崩壊とともに瞬時に潰え去つた現実に直面して、名状しがたい深い傷を内面に負つた。表彰の場に臨んで、彼は、その傷を想起しつつ、思念をめぐらせる。

内地にひきあげてきて以来、俺の人生は本当は虚無だつた。今の俺は形骸にすぎない。そしてその形骸を称賛しようとするあなたは、悪意の者か、でなければ虚偽だ。(中略) この壇上にのこのことあがつた、耐えがたく俗化した自己。それを薦めた人々、そして拍手の機会をまつている人々、あなた方の道徳もまた恥ずべきだ。

虚無の人生を生きて、形骸化された自己。この生ける屍を褒め讃える者も、称賛を受けることを肯んじた自分も、それを受けることを薦めた人々も皆恥ずべきだ、と青木は思う。その刹那彼の頬を伝つた涙は、内面の虚無を糊塗しながら善人を装う自己と、そうした自己を肯定する傍観者たちへの、悲哀に満ちた怨念をたたえた怒りの涙だつた。

涙を流すと同時に、それまで青木隆造の内部を支えていた何かが音もなく傾いてゆく。以後、青木は、まるい石が急坂を転がり落ちるように、転落の道をひた走る。彼は、その夜、兼愛園の創立以来園の発展に尽くしてきた秘書の水谷久江を暴力的に犯す。さらに、数日後、兼愛園にもどつた彼は、栄養士の時実正子をも犯してしまう。時実正子は、進駐軍の兵士に強姦された過去をもつ女性で、暴力で犯されるという形でしか異性を知らなかつた。彼女を犯したことによって、青木の内面は、道徳的・倫理的な意味で決定的に崩壊してしまう。

やがて、青木は、表彰の際の副賞二百万円を手にして出奔する。彼は、悪名高い場末の街を、阿片窟を求めて徘徊しつつ、安酒と賭事に没る。そんなとき、彼は、数人の若いチンピラたちに取り囲まれ、恐喝される。チンピラたちが命ずるままに、時計をはずし、内ポケットから財布を取り出して投げ与えたときには、別段彼の感情にゆらぎはなかつた。ところが、チンピラの一人が、彼の腹巻に大金が入っていることに気づき、それを奪い取ろうとしたとき、彼の内部にふいに激しい怒りが湧いた。彼はチンピラたちを制した。

「やめなさい」「私を本当に怒らせるつもりでないならやめなさい」だが、チンピラは、

「偉そうなことをぬかしたな。この老いばれが、怒れるものなら怒つてみやがれ」

と毒づいた。その瞬間、青木の内部で世界が一転し、彼は、持ち歩いてきた一本の黄色いビニール傘を手にして身構えた。彼

はゆっくりといった。

「苦造ども」「本当に殺しあうつもりか」

彼の声音の急変にチンピラたちがたじろぐのを、青木は見た。

彼は、暗闇のなかで薄笑いを浮かべながら、いった。

「見ておけ、本当に人を殺すのはこうするものよ」

青木は、銃剣を構えるように、腰を落とし、気合いとともに傘を突き立て、一人また一人と倒していった。

この事件の後、警察の未決監に収監された青木は、コンクリートの壁に幻の国の象徴を見いだしながら、裁判官に語るべきことばを探る。彼は、内面でこう叫んでいた。

満州人にも朝鮮人にも中国人にもロシア人にも、私は何故か裁かれたくはなかった。私は私と同じ罪、同じ犯罪の共犯者である日本人たるあなた方に……かつては、私と同じ国家の名において行動し、そして後には、私が黒く唇の分厚い子供の手をひいて町の者に石を投げつけられているとき、何事もなかったように着々と出世し、私が己れの心の深淵を覗き込んでおののいている時、議会や官庁で鉄面皮な受け答えをし、テレビにうつし出されては、未来に何の不安もないかの如く、にやにやと笑いながら嘘八百を並べたてていた、この国の指導者、立法者、行政者、そして司法者たち。私はあなた方にこそ裁かれたかったのだ。(中略)そして今私には解るのだ、心の奥底で、誰かに容赦なく裁かれたがっていたのだということが。長い間、何かを渴望

しながら常に満たされることのなかった、その渴望とは、誰かに完膚なきまでに罰せられつくすことだったのだ。それも他ならぬ、あなた方に。

かつて日本国家が満州において犯した犯罪行為。ただ自国の繁栄のみをめざして、土着の民にけつして受け容れられることのない傀儡の国家を打ち建てたその行為を、自分とともに犯した共犯者にこそ、自分は裁かれたいのだ、と青木はいう。彼は、一身に、昭和史の暗部を荷ない、自己のすべてを犠牲にしながら共犯者たちの厚顔無恥を告発しているように見える。

この点に着目するならば、『墮落』の主題は、昭和三十八年に発表された短篇『散華』のそれと同様に、自分たちを戦争へと駆り立てた精神的な何かに蓋をし、さながら戦争はなかったかのように現実を生きる現代の日本人に対して、一つの反定立を示すことにあったと考えられる。そのかぎりでは、『墮落』のうちに、政治的イデオロギを、ひいては、政治と文学との接点を見いだす読みは正しいといわなければならない。単行本の「あとがき」に記された作者の意図は、作品のなかに、いささか舌足らずな形であれば、ともかくも明示されていると考えてよいだろう。

しかし、それにもかかわらず、『墮落』は、単に(あるいは「純粹に」)政治的な文学作品ではない。それは、青木隆造の墮落を決定づける、二人の女性との暴力的な性交渉の場面に、それぞれ一つずつ、親と子の関係をめぐる悲惨な故事が配されて

いる点に注意を払うことによって、うかがい知ることができると。

3

表彰式の夜、つまり、秘書の水谷久江を犯す直前に、水谷と食事をしながら、青木は、およそつぎのように語った。

君たちはもう三国史演義などという本は読まないだろうが、魏の曹操という国家創世の英雄に一つの悲惨な逸話がある。(中略) 有名な赤壁の戦いで、戦い敗れた曹操は馬車を駆って逃げた。その馬車には彼の愛妃とその幼い子供、そして一人の老臣とが同乗していた。追ってくる敵兵は背後から迫る。馬車は重くてスピードを出せず、曹操はいらだてて御者を叱責し鞭うち、そして遂に逃げ足をはやめるためにみずからの子供を馬車から蹴おとそうとした。それも一度ではなく三たびも。そのたびごとに老臣は幼い王を抱きしめてかばい、曹操をいさめた。その諫めの言葉こそ人の肺腑をえぐるように素晴らしい。

さらに、数日後青木は、時実正子とともに料亭へとむかうタクシーのなかで、これも、彼女を犯す直前に、彼女とつぎのような会話を交わしている。

「昔石川五右衛門は、捕われて、子供とともに四条の河原

で釜ゆでにされた時、段々とあつくなくなってゆく釜の中でに王立ちになり、子供を両手で高くしあげて死んだそうだ」

「わかりますわ、そのお話」

「だがね、もう一つの説があつて、最初はたしかに高くしあげていたのだが、湯がもう我慢のならないほど熱くなったとき、泣きわめく子供を釜の底にせずめ、踏み台にしたともいう。時実君はどちらの説が本当だと思うかね」

「奥様のご病氣も、きつと子供さんを亡くされた悲しみと関係がありますのね」

女性を暴力的に犯すというまがましい行為の直前に、青木は、いずれの場合にも、子どもを見捨てる親の語をしている。ソ連軍に逐われて満州の曠野を逃げまどつたとき、青木は二人の子を失つた。彼は、その喪失をめぐって、何か耐えがたい思いを抱いている。それを思い起こすことが、彼を狂気に奔らせる何かを。青木は、その何かに突き動かされるようにして、二人の女性を犯し、道徳的・倫理的に決定的な墮落の途を歩んだのだ。とすれば、青木の墮落の直接の原因は、政治的な挫折にまつわる絶望的な情念だったというよりも、むしろ、子と親との関係をめぐるある心情か、もしくは、それに関連して生ずる何らかの思念だったと考えられる。

作者は、青木の妻が精神を病んで入院している姿を描くことによって、あるいは、彼が、敗戦の際、引率していた開拓村の団員を見捨てて逃亡した事実をあらわにすることによって、彼

と二人の子どもの関係が極限的な状況のなかでどのような形をとったのかを暗示する。その関係は、名状しがたい悲惨に塗りこめられていたにちがいない。読者はそう推察するはずだ。だが、真実は最後まで伏せられたままだ。真実はどこにあるのか、という関心が読者を引きずり、読者を作品の終局部へと半ば強引に導いてゆく。

真実は、終局部において、すなわち、青木が、数人の若いチンピラを殺し、未決監に収監された時点であらわにされる。作者が、極限情況における親子の在りかたを、作品の一つの重要な主題としていたことは疑えない。その真実とはこうだ。

青木は、開拓団を見捨て、妻を捨てて、二人の子を連れて逃げた。そして、破壊されずに残った橋梁を渡るとき、彼は、二人の子どもを先立てて、敵弾が飛んでくるかどうかを確認した。家の定、橋のたもとには銃剣をもった敵兵が姿をあらわし、子どもたちのあとを追った。青木は、「小さく二人の名を呼び、そして——二人の声を合わせた泣声を聞きながら」ひとりその場から逃げ去った。

青木は、この「真実」を誰にも告げていない。だが、青木から見捨てられながらも、かろうじて内地に帰還した妻は、「真実」にうすうす気づいていた。作者は、その気づきが妻の精神に変調をきたしたことをほのめかしている。

青木に二人の子どもを見殺しにさせたものの、そして、そのことによって妻の精神を狂わせたものは、青木自身の「心」ではなかったのかもしれない。それは、むしろ、青木たち一家を極

限状況のなかに放置した国家だったというべきだろう。無敵を呼号し、ソ満国境を死守するはずだった関東軍の主力は、突如侵入したソ連軍と干戈を交えることなく後方に遁走した。日本軍が天皇の軍隊であつて、民衆の軍隊ではなかったことを告げるこの衝撃的な事実は、日本という国家が、本来ならば他の何をおいても保護すべき自国の居留民を無慈悲に見捨てたこと、ひいては、彼らを敵の重囲のなかに放置し敵のなすがままにまかせたことを意味する。国家は民衆を裏切ったのであり、戦後、まず第一にそのことが深く省察されなければならなかったはずだ。ところが、戦後国家の為政者たちは、そうした裏切り行為に無頓着なばかりか、さながらそのような事実はなかったかのように、安逸を貪った。青木には、それが許せなかった。彼らの安逸を根底から突き崩すために、青木は自己処罰をめざして墮落したと見てもよいだろう。

国家と個の関係がいびつに歪む態様を的確に把握し、それを文学を通して鋭く批判する。そこに、作者高橋和巳の意図があつたことは疑えない。しかし、作者は、極限状況における青木と二人の子どもたちとの関係を、ひいては、そこに裸出する人間の底部の情緒をきわだたせることによって、「国家」や「イデオロギー」といった観念によつて織り成される社会的で表層的な営みを超えた根源的な何かを模索しようとしている。その模索は、作者自身が取り立てて尖鋭的に意識化するところとはなっていない。だが、二人の女性を犯す直前に青木が極限状況下での親子の故事を語り、さらに、終局部で青木をめぐる親子

関係の「真実」が露呈されるという結構は、『墮落』という作品が、作者の意図をはるかに超えて、人間性の深淵にまで迫る作品となりにえていることを、如実に示している。『墮落』の読者は、なかならず、この作品に披瀝される思念を追思することをめざす者は、この点を看過すべきではないだろう。

4

人間は、理念に自己の全身・全霊を捧げることのできる唯一の生きものである。理念が、現実のなかに非在の何かを希求しつつ現実から乖離する態様をその常態とする以上、理念を奉ずる者は、現実を固守する者によつて排斥されざるをえない。理念をめがけるがゆえに自己を破壊させるという事態が人間的現実のただなかにしばしば起こりうる理由は、そこにこそ存する。

しかし、理念をめがけて自己のすべてを犠牲にする在りかただけが、人間性の端的な発露だとはいえない。自己の「生きて在ること」へのこだわりが、いかなる理念にもまさつて優先され、『生きて在ること』の希求のさなかに、理念が紙屑のように投げ捨てられるという事態も、一面において人間性の実相を示しているといわざるをえない。本来ならば、職場の在るべき姿が問われなければならない会議の席で、人々は往々にして自己の殻に閉じこもり、あえて理念を口外すまいとする。山積する問題の解決には、理念をめがける視野が必要なのはすなわち、人々はあくまでも沈黙を守る。なぜか。理由は単純だ。大多数

の人々は、理念への接近よりも、むしろ、自己の「生きて在ること」を優先するからだ。権力がつねに現実の側に存する以上、理念の提示は、ともすれば権力の側からの圧迫を招く。人々は、この圧迫に抗してまで、すなわち、現実を「生きて在ること」を犠牲にしてまで、理念にこだわるうとはしない。このことは、人間の「生きて在ること」への欲望の根強さをあらわに示す。『生きて在ること』への欲望は、人性の自然に属する心性であつて、その意義をことさらあげつらう必要はない。人間は、いまここに「生きて在る」かぎり、さらに「生きて在る」つつけることを希求する。「生きて在ること」の截断点としての死が、可能なかぎり回避されるべき事態と目される所以である。だが、この自然な心性が、極限的な状況のなかで開放されるとき、人は、自己が道徳・倫理の枠組みを大きくはみ出してしまふことを自覚せざるをえなくなる。

たとえば、船が沈み、かざられた数の救命ボートに人々が我さきに乗りこもうとするような状況を想定してみよう。そうした状況のなかで、「生きて在ること」への欲望は、他者の同じ欲望を排斥することへと直結する。定員以上の人員を収容した救命ボートが沈みかければ、人は、そのふちに縋つて救いを求める者の腕を斬り落とすことをすら辞さないだろう。もし、道徳・倫理が利他的行為を善と認めるものだとなれば、「生きて在ること」への欲望は、人間が限界状況のなかで不善へと奔る直截の原因にすらなりうる。

要するに、自死か、あるいは、他の犠牲のうえに自己の生命

を保つかという決断に迫られる情況、すなわち、限界情況が形成される時、人間の「生きて在ること」への欲望は、人性の根源的悪性を露呈させてしまう。『墮落』の主人公青木隆造は、限界情況へと追いつめられて、自己内部にそうした根源的悪性が湧き起こるさまを凝視した人物として描かれている。青木の場合、限界情況それ自体は、民衆（ひいては個）に対する国家の裏切りによってもたらされたもので、人性の自然が内発的に導いたものではない。しかし、それが何によってもたらされたものであれ、限界情況のただなかで問われるのは、「個」が「個」としていかに振舞うべきかという問題である。そこには、底知れず深遠な道徳・倫理の觀念が顔を覗かせている。青木は、自己の内部に聳く「生きて在ること」への欲望のゆえに、その觀念を廃棄した。彼は、「生きて在ること」そのもののためにまつわる自己の根源的悪性を甘受せざるをえない状態に置かれたのだった。

そのような根源的悪性の自覚は、政治やイデオロギーの次元を超えた地点に定位される。「生きて在ること」そのものを根源的悪と観ずる視点に立つとき、人は、存在そのものの意味を問うているのであって、存在の上部（表層）に構築される思念や思弁を問題にしているのではない。高橋和巳の描く青木隆造は、高橋の真意の如何とは無関係に、すでにそうした視点に立つてしまっている。青木は、自身が生き延びるために、妻をも含めた多くの開拓団員を見捨て、果ては、二人のわが子をも犠牲にした。彼は、自己の根底に存在の悪を見てしまったのであり、

それを見た地点から、道徳的・倫理的に立ち直ることはもはや不可能だった。なぜなら、道徳・倫理は存在を善と認めることによって成立するもので、存在を悪と見定める認識のうえに道徳・倫理を組み立ててみても、そこには砂上の楼閣ができていくだけだからだ。

人はいうかもしれない。かりに存在を悪と見定めるとしても、その悪を善へと変容させる契機として道徳・倫理の定立を想定することは十分に可能はずだ、と。たしかに、人性に悪性を見いだしつつも、その悪性を、道徳・倫理によって規制しつつ、善なる規範に準拠させようとすることは、けっして無意味なわざではないだろう。しかし、存在の悪のうえに構築される善性は、構築されたものすべてを一挙に瓦解させるような、地殻変動の可能性に終始曝されている。悪性への規制としての道徳・倫理は、ほかならぬその悪性によって根底から突き崩されてしまう危険性をつねに伴っている。『墮落』という作品は、そうした危険性を正面から見据えるものといってもよいだろう。

自己の「生きて在ること」そのものを根源悪とらえざるをえなかった青木。満州から、そして、厳寒のシベリアから逃れた後、彼が、米兵と日本人女性とのあいだに生まれた混血児たちの保護と養育を志したとき、彼の内部には、道徳・倫理に内在する規制的な権能によって自己を律したいという思いが湧いたはずだ。だが、道徳的・倫理的観点から善行と規定されうる行為をどれほど積み重ねてみても、青木は、ついに、自己の根底に蠢動する存在の悪を払拭することができなかった。それど



ころか、彼は、存在の悪に根ざしてかつて彼が採った行為をいくたびとなく想起するうちに、それ（存在の悪）が、どこまでも担いつづけざるをえない負荷として自身を圧迫しつづけること、そして、自身の道徳性・倫理性をぐらぐらと揺さぶりつづけることを知った。青木は、どうあがいてみても、存在の悪を免れることのできない自己の態様に気づいたのである。そのとき、彼は、徹底した自己処罰を欲した。自己を罰することのみが、存在の悪から自己を切り離す唯一の方途でありえたからだ。だが、「生きて在りたい」という欲望を廃棄することができなかったがゆえに、存在の悪を露呈してしまった青木にとつて、自己処罰は、自死という形態をとりえなかった。みづから自己を処断することができないうれば、彼に残された自己処罰の方法は、社会的に破滅し、社会ないしは国家の名で裁かれることだけだった。青木が、この世に生き身を曝しながら、どこまでも果てしれず「墮落」しつづける所以である。

『墮落』という作品のなかで、もっとも注目すべき言説は、第二章5の冒頭に見える次の一節ではないだろうか。

夜、妻の容態が気懸りだからと、水谷に言い残して兼愛園を出た青木は、五万円の現金と二十五万円の小切手を懐にして、夕刻、時実正子と夕食を伴にし、ベッドを伴にした料亭にタクシーを走らせた。歓楽街も旅館街も、夜は、みすばらしさや意地蔵なさを闇にかくして、落着いてみえる。俺は生きていてはならない人間だという一種本質的な反省

をおしつぶして、青木は、意味あり気に笑っている仲居にチップを握らせ、海側の部屋へと階段を登っていった。

暴力的に犯した時実正子を開き者とするために、いくばくかの金銭を手渡そうとする青木の行動を描くこの一節には、「俺は生きていてはならない人間だという一種本質的な反省をおしつぶして」という言説が含まれている。青木は、自己の「生きて在ること」を罪深い負荷と見る認識に立つて、いわば「存在の負い目」ともよぶべき悲痛な情緒を胸に抱いていたといえよう。その負い目の感覚を「一種本質的な」ととらえるとき、作者高橋和巳は、人間存在の根源悪を見極めていたのではなかったか。たしかに、作者の意図は、政治の垂みを文学の目から批判することに存していたのかもしれない。しかし、存在の負い目を本質的なものととらえるとき、作者は、文学の目を超え出でる、より根源的な思索の場に立っている。高橋和巳は、昭和史の暗部を凝視することによって、さらに、人間存在そのものの暗部をも見てしまったのではなかったか。

5

善人なほもつて往生を遂ぐ。いはんや、悪人をや。

親鸞晩年の高弟唯円が著わした『歎異抄』の一節である。善人の往生を副次的な事態と見なし、悪人の往生を第一義的にと

らえるこの異様な一節は、親鸞のいう普善を道德的・倫理的なものにとらえる解釈を徹底的に排斥する。妄語、姦淫、殺生などの道德的・倫理的悪を犯す悪人が、それらの悪行から遠ざかった地点で自己を厳しく律しようとする善人をさしおいてまず第一に往生するというのが親鸞の考えかただったとすれば、親鸞は仏教の道德・倫理を根底から突き崩そうとする破戒僧だったことになってしまふからだ。

悪人が第一義的に往生すると主張する際に、親鸞が問題にしているのは、道德的・倫理的な意味での悪ではない。道德的・倫理的な悪は、人間性の根底に抵触するものとしてあくまでも排斥されなければならない。親鸞は、そう考えている。親鸞が悪人の往生を説くときの、その「悪」とは、道德的・倫理的なものではなく、むしろ存在論的なものだった。

『高橋和巳「堕落」論』として構築されつつある小稿、『堕落』という作品が開示する思想的意味を汲み取ろうと志すこの論稿で、親鸞の思想を詳細に論じることができない。小稿に許されるのは、親鸞思想への追思の結果、つまり結論を簡潔に提示することだけであろう（『追思』の一過程としては、拙著『信』の思想——親鸞とアウグスティヌス——北樹出版、一九九八年、『親鸞——悪の思想——』集英社新書、二〇〇一年など参照）。結論はこうだ。すなわち、親鸞にとって、他者を排除することによってしか生きられない人間存在は、その存在構造において根本的に悪なる存在であり、彼のいう「悪人」とは、そうした存在構造上の悪性を抱えこんだ存在者として自己が在

ることを自覚している者の謂にほかならない。

人間は、生きて在るかぎり、特定の時空を占有している。しかも、その占有は、他者を徹底して排除することによって成り立つ。人間は、自分が生きて在るためには、他の仏性をもった生きものを殺戮し、その肉をくらわなければならないし、また、場合によっては、他の人間を殺害しなければならない。親鸞は、人間が生きて在ることにまつわる、こうした不可避的な悪を見据えていた。彼によれば、このような根源的悪性を内に抱えこんだ存在者として、自己が生きて在ることを自覚する者、すなわち、悪人は、その存在が悪性に貫かれていたゆえに自己はどこまでも無力たらざるをえないことを知り、すべてを超越者弥陀の願力に委ねようとする、だから、悪人は、弥陀の本願の直接の対象となり、まず第一に往生を遂げることができる。

悪人が、自己の根源的悪性を噛み締めている者の謂だとすれば、善人とは、そうした根源的悪性を自覚せず、自身の権能のもとに独力で善行を積むことができると考えている者ということになる。親鸞は、こうした善人を、「自力作善の人」と規定し、そういう人は、弥陀の本願の直接の対象とはならない、と断ずる。

『堕落』の主人公青木隆造は、親鸞のいう「悪人」だった。

彼は、自己の「生きて在ること」を実現するために多くの他者を犠牲にした人間であり、しかもそのことを明瞭に自覚し、異様なまでに激しく自己処罰を望んだ。時実正子との淫靡な関係を兼愛圏の職員たちから追及され、その関係の目撃者たちを殴

りつけることによって自身の不純を糊塗しようとしたとき、青木はその内面でつぎのように叫んでいた。

——この極悪非道の私を殴打せよ。この残酷無道の私を撲殺せよ。正義が正義であるためには力が加わらねばならぬ。不殺生の仏法を守るためにも、誹法する聞提は殺されねばならないように。もし君たちに大慈悲があるのなら、今ここで私の存在を抹殺せよ。

青木は、自己の「極悪非道」「残酷無道」な在りようを痛切なまでに明瞭に自覚している。彼が、悪性の自覚者であり、『妖異抄』に説かれた往生すべき「悪人」であることはあきらかだ。だが、青木は、自身が悪人たるがゆえに救われるという觀念とは、あくまでも無縁である。彼は、自身を、永遠に許されざる者、もし「大慈悲」というものがあるならその名のもとに撲滅されるべき者にとらえる。彼は、ただ罰のみを欲し、ついに救いを求めようとはしなかった。

「善人なほもつて往生を遂ぐ。いはんや、悪人をや」と語るとき、親鸞は、超越者の存在を確信し、超越者による救済を求めていた。だが、『墮落』の青木隆造は、そして作者高橋和巳は、超越者の存在とその権能とに信を置くことができなかった。彼らは、自己存在の根源的悪性を鋭く見据えながらも、その「見据える」という精神的な営みの果てに、やすらぎが開かれる位相を夢見ることができなかった。そこに、青木隆造の、そ

して高橋和巳の悲劇が存する。彼らには、極楽浄土が見えなかった。極楽浄土が見えないということは、それとの対照関係においてのみ成り立つはずの地獄とすら無縁であることを意味する。

高橋和巳の事実上のデビュー作『悲の器』の主人公正木典膳は、社会的かつ精神的な破滅の果てに地獄を見いだし、それをめがけて下降しようという意志を自己内部に確定することによって、いわば死の彼岸にみずからの生の意味を掻き探ろうとした。だが、『墮落』の青木隆造は、そして、この作品を創作した時点における高橋和巳は、地獄を己れの住みかとするこゝとすらできなかった。彼らは、存在の負い目を荷ないながら、この世の現実のなかを果てもなくさまよいつづける。

救いはどこにもない。『墮落』という作品の底流をなす、無限の闇の深部にむかつてどこまでも沈降してゆくような不安定な情調は、主人公と作者の魂が無救済な虚無のなかを漂うことによってもたらされたもののように見うけられる。

『墮落』を、人間の根源的悪性を剔抉する物語と解することは、すでに示唆したように、作者の意図を超えた地点に作品の意義を見いだす読みを展開することを意味する。このような読みが「研究」として妥当かどうか、一応の結論を得た現時点でもなお不安が残る。しかし、「日本人の昭和の精神史を内部から文学を通して反省し批判する」という高橋和巳のもくろみは、『墮落』の雑誌発表とほぼ同時期に書き始められた『邪宗門』によって、より大規模に、より精密に現実化されている。同時期の二つの作品が、ほとんど重なり合う同質の主題のもとに、類似の

内容をもつものとして書かれる必要があつたとは考えられない。『墮落』の副題「あるいは、内なる曠野」は、主人公の破壊を、外部的諸要素に起因する事態としてよりも、むしろ、彼の「内」面の荒廃に由来するできごととして描こうという意図を示してはいないだろうか。『邪宗門』が昭和の精神史を鳥瞰的に見渡す作品であるのに対して、『墮落』は、その同じ精神史を「個」の内面からとらえ返す作品だった。そう解釈しても、泉下の作者は、けっしてそれを否定しないと思われる。

——二〇〇一年六月二日稿——

（いとう・すすむ 筑波大学哲学・思想学系助教授）